

第13回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「アイーシャと奇跡の種」

千葉県 麗澤高等学校 3年 大場 あすみ



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

優秀賞〈銀の星賞〉

アイーシャと奇跡の種

千葉県 麗澤高等学校三年 大場 あすみ

「おじさん！ アイーシャは来なかつた!?」

階段を駆け上がり、僕は荒い息のまま、ゲート番のおじさんに向かつて叫んだ。

「ムム、その声は……おお、レオ君じゃないか。久しぶり。元気か」「挨拶は後でいいから！ ねえ、アイーシャがどこにも見当たらぬんだけど！ あいつまさか、外に出たの？」

「……ムム」

いつ見ても眠たげなおじさんは、困ったように白い眉尻を下げる。

「僕、アイーシャを連れ戻さなくちや。ゲートを開けて！」

おじさんは目をしょぼしょぼさせながらパネルを操作して、ゲートを開けてくれた。

「おじさん、ありがと！」

ゴーグルをきつちりとつけると、俺は砂漠の中へ飛び出した。

「アイーシャ！」

真っ赤な巻き毛の女の子は、すぐに見つかった。

灰色の砂嵐が吹き荒れる中、後ろでくくつた髪を翻し、驚いたようにこちらを向いたアイーシャは、すぐにその顔をしかめた。

「なーんだ、レオか」

「何してなんだよ、こんなところで。おばさんが心配して、お前を探し回つてるよ」

黒い大岩のもと、風を避けるように座り込んでいるアイーシャの手元を覗^(ぞ)き込む。十一歳という歳のわりに小さな彼女の手には、ゴルフボール大の青い何かが握られていた。

「……なにそれ？」



「種よ
「たね!」

すつとんきょううな声を出した僕を得意げに一瞥して、アイーシャは両手で砂をかき分け出した。

「種って、あの、植物の種? 教科書に出てくるやつ?」「そう」

「へえー」

僕はまじまじとその青い種を見つめた。
「ちょっと触らせてよ」

「だーめ」

ちえ、アイーシャのけち。小さく舌打ちした僕を気にも留めず、穴を掘り終えたアイーシャは、種をその胸に抱きしめた。

「おじいちゃんの遺品の中から出てきたの。これはきっと、世紀の大発明に違いないわ」

そう呟いて、彼女は種を埋めた。

「これでよし、と」

満足げにすっくと立ち上がったアイーシャに、僕は慌てて声をかける。
「アイーシャ、水は?」

「……え?」

ぽかんとするアイーシャに、僕は理科の教科書に書いてあつたことをそのまま告げる。

『水がないと植物は芽を出さない』よ

「……」

僕に指摘されたのが悔しいのか、アイーシャは乱暴な手つきで腰のバッグから水筒を引っ張り出し、それでも丁寧に、砂の上に水をかける。

「かけすぎるなよ」

「わかってる。一つ年上だからって大人ぶらないでよ、レオ」

足早に地下シェルターへと向かうアイーシャの背中を、僕は急いで追いかけた。



賢治のまちから
高校生☆語彙大賞

その昔、オアシスと呼ばれたこの地も、いまや他の陸地と同様に、砂漠とな
化していた。

僕たち子どもは、緑の森も、青い空も、海も、教科書の中でしか知らない。
そもそも植物なんて、シェルター内で栽培された野菜くらいしか見たことが
ない。

「アイーシャ、あれ、何の種？」

シェルター内の真っ白な廊下を歩きながら、僕はアイーシャに尋ねた。

「……わからない。でも『奇跡の種』なんだって」

「キセキのたね？」

大きく頷いて、アイーシャは続ける。

「おじいちゃんの研究室を整理していたら、青い、綺麗な箱が出てきたの。
開けてみたら、奇跡の種ってラベルと一緒に、あれが出てきたの」

アイーシャの唯一の肉親であつたおじいさんは、先月亡くなつたばかりだ。
アイーシャが急に歩みを止めた。僕も隣で立ち止まる。

「……おじいちゃん、死ぬ前に言つてたんだ。『すばらしい植物を開発した、
これで人類は助かるかもしれない』って」

「……あが、その発明品かもしれないってこと？」

「私は、そうだと信じてる」

と、廊下の奥から、白衣をひらめかせてニス・バートンが歩いてくるのが見
えた。彼女は僕たちの理科の先生だ。

「まあ、アイーシャじゃないの！」

「……げっ」

顔をあげたアイーシャが、心底嫌そうな顔をして、踵を返す。

「こりつ、逃げようとするんじゃありませんアイーシャ！ ちゃんと学校に
来なさい！」

走り出したアイーシャと、その背を追いかけるニス・バートンを見送る僕
の頭の中は、あの青い種のことでいっぱいだった。

それからしばらくたつたある夜、父さんが疲れ切った顔で、大人たちの会
議から帰ってきた。

「父さんお帰り」

「ああ、ただいま」

病院棟で夜勤をしている母さんに代わり、僕は冷蔵庫から夕飯を出し、電子レンジにかける。

「ビール、これで最後だけど。母さん、来週の配給にちゃんと頼んだかな」ソファーにドスンと座った父さんは、ネクタイを緩めながら苦々しい口調で言った。

「本当にそれが最後さ。次の配給からはもう、ビールは来なくなる」

「ええつ？」

僕は驚いて、危うくビール缶を床に落としそうになつた。

「今日の会議で、アルコール、ジュース類は今後一切製造禁止になつた」

「嘘でしよう!?」

「本当だよ、レオ。残念ながら」

名残惜しそうに、最後のビールを飲み干す父さんに、僕は何と言つたらいいのか分からない。

「……水の蓄えが、あと五年で底を尽く」

空き缶を弄もてあそびながら、父さんは乾いた声で呟いた。

「海は？ 何十年か前までは、海の水をシェルターの中に引いてきてたって、ゲート番のおじさんが言つてたけど……」

「昔はな。でも今はできない」

「どうして？」

「塩分を取り除くことはできても、俺たちの今の科学技術では、海水の汚染物質を完全に取り除くことができないんだ」

「……おせんぶつしつ、つて？」

「自然や人にとつて、毒となるものだ。今の海は化学変化を起こしきて、あまりに毒を含みすぎている。どうしたって飲み水には使えない」

明日学校で、ミス・バートンに詳しく聞いてみなくちゃ。僕はそう考へながら、父さんに質問を続ける。

「じゃあ、……僕たち、どうすればいいの？」

「今のところはどうしようもない。一人あたりに配給される水の量を減らさなければならない。」

「先月も減らされたばかりなのに……」



「誰かが解決策を見つけるまでは、何とかして水をもたせなくちゃならない。
……こればっかりは、仕方がないことなんだよ、レオ」
父さんが僕の肩を叩く。濃いクマのできたその顔を見て、僕ははっと閃いた。
(人類を救う奇跡の種って、もしかして…)

「……水のなる木?」

「その種なんじやないかと思うんだ!」

「……そうかしら……」

ゲート番のおじさんが、砂漠に出た僕たちに「氣イつけてな」と叫んだ。
アイーシャと僕が種のもとへ通うようになつて、もう五日目になる。ゆつ
くりゆつくり、慎重に種に水をまくアイーシャを横目に、僕は水のことにつ
いて考えていた。

「昔、人類がまだ宇宙に行つてたころ、スペースシャトルの中では、尿を水
に変えてたつて、この前ミス・バートンが言つてたんだ。その技術を取り戻
せば、僕らはきっと生き延びられる!」

「……そ」

「だから僕は決めたんだ、今日から僕はその研究者になる! アイーシャは
この、水のなる木……かもしれない、奇跡の種を育てる! どっちかが僕ら
の、人類の未来を救うかもしないんだ! すごいだろ!?」

「……みたい」

「え?」

「馬つ鹿みたい!!」

アイーシャは突然、地面に向かつて怒鳴り声をあげた。蒼い双眸あおそっぽうがギッと
僕を睨みつける。その目は、今にも溢あふれ出しそうなほど涙たたを湛えていた。

「おじいちゃんが一生かけて作ったのが、たつた一粒の種だったのに!?
たつた五年で私達に何ができるっていうの!? 私たちみたいなただの子供
に、何が変わられるっていうのよ!?」

「……アイーシャ……」

「なんで、どうして芽ひのきが出ないの!!」

ばん、と地面に掌てのひらを叩きつけたと思つたら、アイーシャはそのままぐら
りと横に倒れた。

「アイーシャ!?」

驚いて抱き起こしたアイーシャの体がものすごく熱くて、僕は一瞬、頭が真っ白になった。

病院棟に抱ぎ込まれたアイーシャは、疲労と脱水症状と診断された。きっと種に水をやるために、今まで自分の分の飲み水を我慢していたのだろう。（アイーシャの馬鹿……）

ひどいと精神障害を起こすかもしれない。看護師である僕の母さんは、アイーシャを個室のベッドに寝かせながらそう言つた。

（アイーシャ……なんで僕に相談してくれなかつたんだよ……）

点滴を打たれ、眠つたままのアイーシャの顔を、責めたいような、泣きたいような気持ちで見つめた。

「私たちみたいなただの子供に、何が変えられるつていうのよ!?

先ほどのアイーシャの言葉が、頭の中でひつかかっていた。

（そんなこと言うなら、アイーシャ、君はどうして毎日、種に水をやつてたんだ? あんなに真剣な顔をして……）

「アイーシャ、君が元気になるまでは、僕があの種に水をやるよ。アイーシャが目を覚ました時、安心できるように」

眠つたままのアイーシャの手を握つて、僕はあの種を守ろうと、心に誓つた。

「レオ、あなた、よく砂漠を出歩いてるんですね？」

僕がミス・バートンに呼び出されたのは、アイーシャの意識が戻つた次の日のことだった。

「そうですけど……、それがどうかしましたか、ミス・バートン」「非常によろしくないわね」

豊かな金髪をかきあげながら、先生は顔をしかめた。

「外は危険がいっぱいなのよ。ドック内の人間が安易に外に出てはいけないつてことは、あなたも知っているでしょう?まあ、あなたたちはまだ子供だから見逃してもらえているけれど」

ミス・バートンは長い爪でこつこつと教卓を叩いた。

「……レオ、悪い友達と付き合つたせいで、優秀なあなたにまで悪い影響が及ぶのは、良くないわ」

「悪い友達!? アイーシャが!? 僕は怒りで顔が熱くなるのを覚えた。

「アイーシャは悪い友達なんかじゃない！」

僕は鞄をひつ掴み、教室を飛び出した。

僕とアイーシャが外に出るのを止めさせたがったのは、何も、ニス・バートンだけではなかつたのだ。

「おじさん、どうして!?」

「ムム……悪いのぉ、レオ君……これも総会で決まつたことなんじゃ。子どもであれ、総会からの許可なしにここを通すことはできない……」

総会、父さんも参加する、大人の会議。僕は大声でおじさんをなじつた。
「昨日まで大丈夫だつたことが、急に今日からだめだつて言う！ 大人は勝手だ、僕たち子供の声なんて、聞こうともしないじゃないか！」

「ムムム……すまんのぉ……」

どんどん小さくなつていくおじさんは、それでもどうしたつて、ゲートを開けてはくれなかつた。僕はたまらず、病院棟へ走つていつた。

……アイーシャの病室のドアには、面会謝絶の札がかかっていた。
(どうしたんだ、アイーシャ！)

今の僕には、それがどうしても、大人たちの画策としか思えなかつた。
(しつかりしろ、レオ！)

泣き出しそうな自分の顔を叩いて、僕は病院棟を後にした。

(大人たちに見つかりさえしなければ……そうだ、夜中に砂漠に出ればいい！)

僕はぎゅうっと拳^{パン}を握り締めた。

夜の砂漠は、信じられないくらい寒かつた。

ゲート番のおじさんが居眠りをしている隙^{すき}に、僕はいつもおじさんがやつている通りにパネルを操作して、ゲートを開けた。

懐中電灯であたりを照らす。砂嵐は治まつているものの、曇と同じ、厚く立ち込めた雲のせいで、地上は闇に閉ざされていた。
(たしかこっちのほうだつたはず…………、って！)



僕は遠くに、小さな白い灯りを見つけた。

(まさか!)

砂に足をとられながら、僕は全速力で砂漠を駆けた。闇の塊のような黒い岩のもとにいたのは、やっぱり彼女だった。

「なにやってんだ、アイーシャ!!」

薄っぺらい病院服に包まれた肩を震わせながら、アイーシャはただひたすら、手すから地面上に水をかけていた。

「お願い、お願い……芽を出して」

「アイーシャ、水のかけすぎだ!」

僕はアイーシャの手首をつかんだ。バケツに溜めた水をずっと掬い続けていたせいで、その手はすっかり冷え切っている。

「黙つて!」

ぼろぼろと涙を零しながら、アイーシャはまた僕を睨みつける。

「どうすればいいって言うのよ!?」

アイーシャが僕の手を振りほどく。

「おじいちゃんが能無しの、誰の役にも立てなかつた科学者だなんて、もう誰にも言わせたくないの! おじいちゃん、死ぬまでずっと後悔してたのよ! 『この星を駄目にしてしまつたのは、わしら大人の責任だ。アイーシャ、お前は何も悪くない。子どもたちに申し訳ない』って! いつもそう言つてた!」

音のない砂漠に、アイーシャの声が、どこまでも響いていく。

「そんなおじいちゃんが、『能無し』だったはずないじゃない! 発明は成功しなくちゃいけない、絶対に芽は出るはずなのに!」

それなのにどうして、どうして。地面に両手をつき、アイーシャは泣きじやくつた……僕にはその背中をさすつてあげることしかできない。

「あと五年、あるんだ……。アイーシャ、芽はきっと出るよ……」

アイーシャにそう言い聞かせる僕の声だって、信じられないくらいに弱弱しい。

(あと五年……たつたの、五年!)

それが僕たちに残された時間。嫌だよ、僕たちその時、まだ十七と十六じゃないか。たつたそれっぽつちしか生きられないなんて。





気がつけば僕も、声をあげて泣きだしてた。二人分の涙が、ぽたぽた、ぽたぽたと地面に落ちていく。すると……。

「ふわり。

突然、砂の中から、小さな青い光が浮き上がってきた。

「……アイーシャ、これは……？」

光は僕とアイーシャの周りをくるりと一回りして、ふわふわと、宙を漂う。すると……砂の中から、小さな芽が顔を出したのだ！

「わあっ、レオ見て！ 芽が出たわ！」

芽は光を追って、どんどん伸びていく。緑色の茎がやがて茶色の太い幹となり、みるみるうちにそこから枝が伸び、大きな葉が茂つていく。

「そうか、塩水だ！」

「塩水？」

すっとんきょうな声をあげた僕に、アイーシャは首をかしげた。

「この木は、たくさん塩水があるところで芽を出すんだ！ なんで気がつかなかつたんだろう？」

白み始めた空の下、僕は木の根元の砂が、灰色から、だんだん砂本来の黄色に戻っていることにも気がついた。

「もしかしたらこの木、汚染物質を吸収して成長しているのかもしれない！」

「……おせんぶつしつを、きゅーしゅー？」

分からぬい単語に眉根を寄せたアイーシャの頭を、僕はぐしゃぐしゃとかき回した。

「わっ、なにすんの !!」

「これは世紀の大発明だよ、アイーシャ！」

目を合わせてそう言つてやれば、きょとんとした後、彼女はいつも通りの勝気な表情を見せた。

「当つたり前じやない！ 私のおじいちゃんの発明なんだもの！」

アイーシャの、まだすこしだけ涙の残つた青い目が、朝の光を映してきらきらと輝いている。ああ、きっと青空つて、こんな色をしているんだろうな。アイーシャと、伸びていく奇跡の木を眺めながら、僕はそう思った。